

「螺鈿迷宮」

海堂 尊 著、角川書店

加藤 正暉（学部一年生）

東城大学医学部の学生である天馬大吉は、複数の人物からの依頼で終末医療専門病院であると共に、黒いウワサが絶えない碧翠院桜宮病院にボランティアとして潜入する事になった。だが、天馬は潜入から半日で姫宮によって怪我を負いボランティアから入院患者となる。天馬は桜宮病院の医師達や他の入院患者達と関わるなかで、あまりにも急速すぎる入院患者の死に対して桜宮病院への疑問を抱くようになる。



この螺鈿迷宮は「チームバチスタの栄光」シリーズに間接的に関わった作品で、ここで起きた事件の顛末がバチスタシリーズや他の作品に影響を与えてくる作品です。もっとバチスタシリーズを深く読みたい人におススメです。

「千住家にストラディヴァリウスが来た日」

千住 文子 著、新潮文庫

西峯 礼子（学部一年生）

三〇〇年の時空を超えて、持ち主を探す名器「ストラディヴァリウス」(デュランテイ)の伝説と、その購入に一致団結していく過程を通じて、父親の喪失感乗り越えていくある家族の物語。この本は、有名なヴァイオリニストである千住真理子さんの母「千住家の教育白書」で知られている千住文子さんの視点からみた経緯が書かれています。クラシック音楽の専門知識がなくて

も比較的サクサク読むことができま。というのは、話の中心がストラディヴァリウスではなく、千住家だからです。この家族が、この楽器との出会いを運命と信じ、突き進んでいく姿に心揺さぶられました。読んだ後、千住真理子さんの奏でるヴァイオリンを聴いてみたくなる一冊です。クラシック音楽の奥深さを知る第一歩として、読んでみては？



「風が強く吹いている」

三浦 しをん 著、新潮文庫

西道 涼（学部一年生）

致命的な故障でエリートランナーの道を諦めたハイジとひよんな事から走る所を追われたカケルが出会う。ハイジはカケルが自分の夢の切り札だと確信。それは漫画オタク、ヘビースモーカー、アメリカからの留学生など陸上経験が無い寮の同僚たちと箱根駅伝に出場すること。初めは乗り気ではなかったメンパーもハイジのトレーニング法、夢への執着心、仲間を信じる気持ちメンパーの心を変えた。そして一本のタスキがつながっていく。走ると

いう行為しかしていないのに読者の心をつかみ手に汗握る小説はないと思いません。どんな人でも皆でひとつになり頑張れば夢はきつと叶うことを教え、希望を持たせてくれるそんな一冊です。



『Another』

綾辻 行人 著、角川書店

飯尾 優一郎 (学部一年生)

一九九八年、春。夜見山北中学校に転入してきた榊原恒一は、何かに怯えているようなクラスの雰囲気違和感を覚える。不思議な存在感を放つ少女、ミサキ・メイに惹かれ、接触を試みる。恒一だが、いつそう謎は深まるばかり。そんな中、クラス委員長の桜木ゆかりが凄惨な死を遂げた。二十六年前から続くこの『災厄』の正体は？

二〇一〇年版の「このミステリーがすごい！」国内編で、第三位にランクインし、また、第十回本格ミステリ大

賞の最終候補にも。

実写映画かも決定した綾辻行人の本格ミステリー小説三

ぜひ一度読んでみてください。



『やればのできる!』の研究』

キャロル・S・ドゥエック 著、今西 康子 訳、草思社

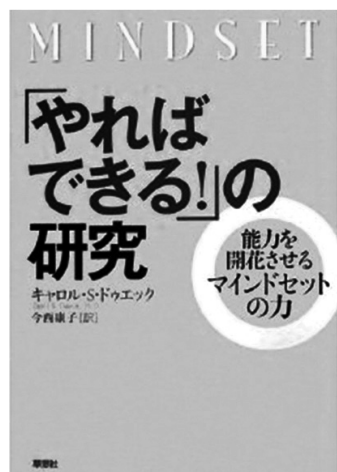
豊岳 実由 (学部一年生)

この本は、誰もが持ちうる信念(マインドセット)の力がどれほどのものかを記した本です。

例えば、個人の才能は生まれつきで努力によって伸ばす事が出来ないと思われている人は、努力を恐れ、本気が出せません。対して、努力する事で能力が伸びると信じている人は、経験や練習を積み量が多いほうがいいと知っているので経験の内である失敗を恐れることはないと思っています。

このように信念の違いが物事の成功・失敗だけでなく、人間関係や子育てにもとても重要であることも述べています。

自分を見直す方法を教えてくれる一冊です。



『大学受験に強くなる教養講座』

横山 雅彦 著、ちくまプリマー新書

大濱 高佳 (学部一年生)

この本は、私が総合科学部に入学しようと思うきっかけを作った一冊です。タイトルに「大学受験に強くなる」とありますが、もう受験を終えてしまった大学生にとっても読み応えがあると思います。むしろ大学生こそ読んでほしい内容です。本の内容は、還元主義の限界、脱工業社会への移行、宗教的な視点からみた現代社会などさまざま。特に印象に残ったのが、「学際的」について語っている最後の章です。総

科生にはぜひ読んでもらいたいです。

なぜ「総合的」「学際的」という言葉が最近になってよく言われるようになったの？総合科学部の存在意義って？何も知らずに総科に入った人も、この本を読んだ後は総科に入ってよかったと心から思えるようになると思います。



『とるにたらないもの』

江國 香織 著、集英社文庫

吉盛 絵里加 (学部一年生)

この本は江國さんが身近にあるものに対する思いや印象を綴ったエッセイです。

この中で私のお気に入りには、「かばん」についての記述です。江國さんは大きい「かばん」を好んで使用していたそうですが、その後、文庫本と口紅と鍵さえ入れればいいという結論に至ったそうです。つまり小さい「かばん」で事足りるということです。このエッセイを読んだとき、私自身も大きい「かばん」が好きで、使いもしないもの

のたちを「いつか使うかもしれない」と思い、たくさん詰め込んでいました。しかし、これに影響されてか、小さい「かばん」を持つようになりました。この本は、普段あまり気にしていないものに意識を向けさせてくれ、そしていつもと違う風景を見せてくれる。そんな素敵な一冊です。

